

第 27 回 いたばし国際絵本翻訳大賞 イタリア語部門 講評

熟練の絵本作家ルチア・スクデーリの描く動物たちは、おどけた雰囲気の中にも優しさとたくましさを感じられます。砂漠で繰り広げられる、「空を飛べない鳥らしきもの＝ダチョウ」と「ワニとトカゲの中間の生き物＝イグアナ」との攻防ですが、訳しはじめる前に、まずは絵をじっくり観察しながら読んでみましょう。動物描写を得意とする作家だけあって、随所に動物たちの生態が反映されています。

砂漠の小さな生き物たちは、どうして「ぼくらは空を飛ぶやつらなんて信用できない(*noi non ci fidiamo di quelli che volano*)」と言っているのでしょうか。空からヒューッと舞い降りてきては自分たちの仲間を食べてしまう猛禽類を恐れているからですね。そこを押さえれば、冒頭で、ダチョウの首から上だけを見て、「この不思議な生き物はなんだろう」と近づいていったイグアナが、次のページで相手が鳥だと気づいて、「わかってるよ、君は鳥だろ」なんて強がってみせながら、内心はびくびくしているのかもしれないと想像できます。それが、「そんなふうに見ないでくれ(*non mi guardare così*)」という台詞や、離れていく(*allontanandosi*)という描写にあらわれているのです。だから、仲間たちの所へ行行って、まずいぞ、また新しく鳥(*un nuovo uccello*)が増えたぞ、と注意を喚起するのです。

また、イグアナが喉もとにある袋をふくらませるのは、縄張り争いのときなどです。ですので、ダチョウを初めて見たイグアナは、相手の首を見ながら自分の喉袋を精一杯ふくらませているわけです。絵を見て位置関係を把握していれば、なぜ *Lo guarda dal basso in alto* という表現が用いられているのかも理解できると思います。「上から下までじろじろ」と逆に訳すと、岩の上からイグアナがダチョウを見上げている絵と矛盾してしまいます。

そのあたりのことを把握したうえで物語を訳すと、ただ前から順に文字だけを追いながら訳すよりも、訳文の流れがよくなりますし、より適切な訳語を選べるようになります。おのずと、物語が読み手に伝わりやすくなるはずですよ。

最初に、*Un essere tra la lucertola e il coccodrillo* と提示された生き物が、1ページ目の終わりでは *lucertola*、4 ページの3行目で *iguana* となり、最後の行でふたたび *lucertola* に戻っています。いいかげんな書き方のように思えますが、これは「正体がよくわからない」というイメージを強調するための意図的なものでしょう。ただ、「トカゲ」と「イグアナ」が別々に登場していると読めてしまうようですと、読者に誤解を与えてしまいますので工夫が必要です。昆虫も、*blatta* と *scarafaggio*、2通りの単語が用いられていますが、訳語は統一してしまってもかまいません。必ずしも「ゴキブリ」でなくてもいいと思います。

今回のテキストには、ところどころに長いセンテンスが見受けられました。たとえば、*Risponde struzzo, facendo finta di non aver capito che stavano parlando di lui.* のように、1つのセンテンスのなかに、主語の異なる2つのフレーズが入っている複文は、読みにくならないように工夫しましょう。そのままイタリア語を忠実に訳すと、「ダチョウは、ほかの動物たちが彼の悪口を言ってい

たことに気づかないふりをしながら、答えました。」となります。これでも間違いではありませんが、視点をダチョウに統一して、「ダチョウは、悪口を言われていたことに気づかないふりをしながら、答えました。」としてあげると、stavano parlando の主語を敢えて特定する必要もなくなるし、di lui の部分も訳出する必要がなくなり、すっきりします。主語に応じて動詞が活用するイタリア語と、主語を明らかにすることがあまり好まれない日本語の文章構造の違いを頭の隅においておくと、読み心地のいい訳文になるのです。

以下に、いくつか、解釈の難しかった箇所をあげておきます。

1 ページ Sì, va bene, non dicevo in quel senso, anch'io se è per questo vengo da un uovo, :「ああ、それはわかってるけど、そういう意味で聞いたんじゃないんだ。それを言うなら、ぼくだって卵から生まれたさ」。このような場合の va bene は、「そんなことぐらい言わなくてもわかってるさ」といったニュアンスです。

4 ページ era così, per parlare...: per parlare は、文字通り「話すために」。つまり、「話のきかけとしてそう言っただけだよ」という意味です。最優秀賞の方は、「せけんばなしを いただけよ」と訳してくださいました。

4 ページ La questione era che il nuovo arrivato le ali le aveva, ma non si sentiva proprio un uccello e non voleva dare soddisfazione a quell'odiosa, sospettosa lucentola facendo la figura dello stupido. :こうした長いセンテンスは、1文で訳そうとするとどうしても複雑になってしまいますので、いくつかに分けてかまいません。まず前半。「問題は、その新入りにはたしかに翼があったけれども、自分が鳥だと少しも感じていなかった」となります。non si sentiva の主語は、le aveva の主語と同様、il nuovo arrivato、つまりダチョウです。問題なのは、「ダチョウが自分では鳥だと思っていなかった」という点で、翼があること自体ではありません。ですので、カンマの位置で文章を切ってしまうと、おかしなことになってしまいます。Facendo la figura dello stupido というのは、「バカという醜態をさらして」という意味です。自分が何者かもわかっていないことが、「バカという醜態」の内容です。特別賞の方は、4つの文章に分けて、順序も入れ替えて訳してくださいました。「やってきた いきものには はねが ありました。でも じぶんは とりだというかんじが しないのです。だからといって あの いまいましい うたがいぶかい トカゲに じぶんの こともわからない まぬけみたいだと おもわれたくは ありません。それで こまっていたのです。」これだと1回読んだだけで、ずっと内容が頭に入ってきますし、イタリア語の意味も忠実に日本語に置き換えられていますね。

8 ページ *Già! Nel deserto... sai com'è, sole, sabbia, siccità...*: このアルマジロの台詞も、どんなニュアンスで言っているのかわかりにくかったですね。「今日は暑いねえ」というダチョウの言葉を受けて、*già* と言ってますので、「そうだね」「当然だよ」といった意味です。「すでに」という意味合いではありません。その後、「まあ、砂漠といえば、知ってのとおり、太陽と砂と乾燥だよ」と偉そうに説明しているわけです。

11 ページ *Aspettava il vento forte sperando che lo potesse aiutare con il suo soffio a sollevarsi da terra*, : 「ダチョウは、強い風が吹いてくるのを待っていました。そのひと吹きとともに、地面から浮き上がるのを助けてくれるのではないかと期待していたのです」。 *con il suo soffio* の *suo* は「風の」です。その次に続く文章、*Lui non sapeva volare*. の *Lui* は、本来でしたら省略されるはずの主語が書いてありますから、強調です。「ダチョウは、飛べませんでした」と、訳文も主語を入れて、強調するようにしてください。

13 ページ *Ma non riusciva a finire perché le lacrime e la stanchezza lo avevano sfinito*.: *finire* することができなかったのは、文章を終わりまで言うこと、です。「飛ぶこと」ではありません。

15 ページ: *non facevano che battute sulle sue scuse per non farsi vedere mentre volava*.: 〈*non fare che* + 不定詞〉で、「～以外、なにもしない」→「～しかない」という意味です。「飛ぶ姿を見せないためのダチョウの言い訳を、からかってばかりいました」となります。

15 ページ: *Soprattutto lo evitavano, non gli facevano mai sentire quello che si dicevano, oppure ridevano...* : *soprattutto A, B, o C* という構造になっていますので、「のけものにしたり、みんなが はなしていることを ないしょにしたり、おもしろがって わらったり…」(最優秀賞) となります。「話したり、笑ったりしていることを決してダチョウには聞かせませんでした」などと、後半2つをまとめてしまった訳が目立ちました。

17 ページ: *correva così veloce fino a sognare di volare*. : *così ~ fino a* で、「あまりに～なので、しまいには…するほど」、という成句です。*sognare* は、文字通りの「夢を見る」という意味ではなく、「夢想する」ほうです。「それは それは はやく、そらをとんでいるような きがするくらい はやく はした」(特別賞)

19 ページ *Adesso che sappiamo...* : 「それを知ったからには、これからは…」という意味です。つまり、「ダチョウが飛べないとわかったからには、仲間として迎え入れてあげるよ。とにかく、空を飛ばやつらは、信用できないからね」ということが言いたいのです。

最後に、名訳をご紹介します。

「今日はだめでも 明日はかならず。明日来てみりゃ なんにもかわらず」(入選者)。

ダチョウの言い訳をみんなではやすシーンです。なかなか難しいところだとは思いますが、韻を踏んで、リズムよく、はやし言葉としてぴったりの訳になっています。

「そらも むねが いっぱいになり このすてきな できごとに おめでとうの きもちをこめて ひんやりとした雨を たっぷり さばくに ふらせました。」(特別賞)

こちらは最後のシーンです。喜びが、読む人の心のなかに雨といっしょにじんわりと沁みってくる、余韻を残すステキな終わりになっていますね。

ひと通り訳しおえたら、必ず何日かあいだをあけてから、ご自分の文章を読み返してみるようにしてください。その際、読み手に必要以上に負担をかけていないか、という視点も大切です。読み手は原文を知りませんし、絵本の場合はたいてい子どもです。文章の主語がなにかきちんと伝わっているか、平仮名にしたときには、それがほかの意味にとられないか、といった配慮も忘れないようにしてください。たとえば、*cielo* の訳語ひとつとっても、漢字でしたら、「天」でも「空」でもかまいませんが、平仮名にしたときには、同音異義語のことを考えると、「てん」よりも「そら」のほうが伝わりやすいですね。そういった細かな配慮の積み重ねで、訳文の読みやすさが変わってきます。

翻訳は試行錯誤の繰り返しで、悩むことも多いと思いますが、*だんだん*と訳文ができあがっていく過程を楽しむようにしましょう。訳した人の気持ちが文章に反映され、きっと読み手の心にも伝わると思います。

イタリア語部門 審査員 関口英子